TYPE OF INDUSTRY

中小・ベンチャー・中小政策

激動の経営

山形メタル ④

意匠性高い薄板パネル

建築以外へ採用広げる

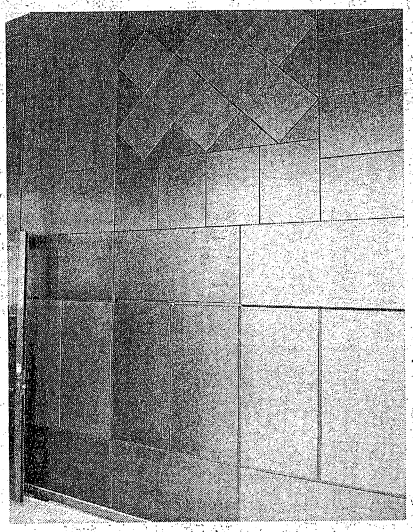
種まき続く

完全無機塗料を用いた建築用金属パネルの量産化に踏み出した山形メタル（山形県新庄市）。社長の庄司正人は「これまで通り、種まきを続けていく」と、新たな成長に向けてアクセルを踏む姿勢を崩さない。新パネルに用いた塗膜の評価方法において、中小企業では珍しい放射光施設を活用した。母材となる金属パネルと表面に塗布される無機塗料との密着性などを新たな視点で確かめるためだ。

2022年度の「仙台市既存放射光施設活用事例創出事業（トライアルユース）」の採択を受けての実施だった。分析会社などとともに塗料の成分や硬化条件を変えた完全無機塗膜中の化学結合状態解析を分子レベルで調べ、塗膜性能の科学的データを蓄積した。ユーザーに新製品の優位性、信頼性を示す狙いだ。

新たな評価法

利用した施設は「あいちシンクロトロン光センター」（愛知県瀬戸市）。現時点で東北地域に利用できる放射光施設はまだない。ただ、東北大学青葉山新キャンパスに整備中の次世代放射光施設「NanoTerasu（ナノテラス）」の本格稼働が24年度にも見込まれる。ナノ（10億分の1）構造や機能を可視化することが可能なナノテラス。開発を担う取締役の今田昭弘は「ナノテラスの利用も進めていきたい」とし、放射光という新たな評価手法も取り入れて競争力向上を目指す。



薄型・軽量化を実現した山形メタルのスパングル金属パネル

軽量化の実現

金属パネルの新しい種として、薄くて軽い建築用スパングル金属パネルの販売も始めた。亜鉛メッキ鋼板をリン酸処理することなどで、厚さ0・5ミリ～1・0ミリメートルの薄板に意匠性の高い亜鉛結晶の花柄模様を施した新製品。これまでは板厚が数センチメートルないとメッキ処理中に変形が生じ、重いパネルしかなかったという。軽量化の実現で「引き合いは多い」（今田）という。意匠性のある金属パネルとして、建築用以外にも生活日用品分野などへの活用など、新分野での利用も積極的に提案していく考えだ。

24年に創業50周年を迎える山形メタル。自前の技術を磨き、自由な営業ができる経営環境を追い続けてきた。価格競争に巻き込まれずに、いかに戦える土俵をつくるか。常に現状に疑問を持ち、自分なりの答えを導いてきた庄司。板金から塗装まで一貫生産体制を地元・山形県の最上地域に構築した。ここにきて「取引先もよりパートナーとして当社を意識してもらえる存在になってきた」と感じている。

社内では庄司の長男で常務の勝己が中心となって50年周年記念誌の制作が進む。庄司は「まいた種を次の世代が育ててくれるはず」と次の成長を見つめている。（敬称略）

（この項おわり。編集委員・大矢修一が担当しました）